



信友会会報

2011年9月

<<7月例会より>>

信友会7月例会では、「共に苦しみ共に喜ぶ3.11のあとに生きる」と題して船本弘毅先生にご講演をいただきました。3月11日に起った東日本大震災の未曾有の災厄の中で、キリスト者は聖書に立ち返りいかに生きるかについての指針を示されました。

信友会 7月例会

共に苦しみ共に喜ぶ～3.11のあとを生きる～ 船本 弘毅先生

今年には戦後66年目の年にあたり65歳以上の人口比は23%ですから、80%近くの人々は戦後の生まれということになります。2011年3月11日の大震災以来135日になる今朝の新聞では、死亡者：15,616名、行方不明者：4,949名でした。阪神淡路大震災の行方不明者3名に比べ、今回の地震・津波に加え福島原発の被害の大きさ、深さは想像を絶するものがあり、私たちが受けた衝撃は計り知れない。今まで使い慣れてきた「戦後」に代えて、「東日本大震災後」、「3.11のあとに」生きて行くと言えるでしょう。大震災に遭遇された苦難の中にある人々を頭に入れつつ、聖書の言葉に学びたい。



コリント及びコリントの信徒への手紙について

今回取り上げる聖書は、「コリントの信徒の手紙—12章12～31節」です。コリントは、ギリシャのペロポネソス半島の入口にあり、二つの良港を持つ交通の要衝であり、歴史的にも政治経済の中心、軍事的拠点でした。パウロの時代は、ローマの元老院の領土で総督を置いたこの地方の中心地でした。パウロは、第2伝道旅行の時に1年半ここに滞在してコリント教会を有力な教会に育てあげました。

新約聖書の構成の27の福音書、手紙等のうち、13がパウロの書簡で新約聖書のおよそ半分を占めます。その内、エフェソ書、コロサイ書はパウロの著作性を疑問視され、テモテ等3巻の牧会書簡はパウロ後に書かれたと思われませんが、パウロの思想が明瞭に反映されています。パウロの手紙の、ローマ、コリントI、IIとガラテヤ書が4大書簡と言われ、キリスト教思想の中心として最も重い位置にあります。その中でもコリントI、IIは分量的に大きな部分を構成しています。コリントの教会へは、他にコリントI5章9節にある淫らな者との交際を禁じた「失われた手紙」と、コリントII2章4節にある悩みと憂いに満ちて書いた「涙の手紙」があると言われ、パウロとコリント教会は親しく深く結ばれていたことを示しています。

私たちが手紙を書くときは、親しい人や愛する人へいろいろな思いを込めて書きます。しかし、パウロの場合は状況が異なります。彼は当時の世界、地中海沿岸の各地を巡って伝道し、教会を建てました。一つのところに留まらずに旅を続けたのです。そのため、それら教会から質問があつたり、問題が生じてその解決を依頼されたので、その解決や仲裁のために手紙を書いたのです。それは、個人の情を伝える私信ではなく、問題を解くための共同書簡として、必要に迫られて書いたのです。フィリピのように穏やかな手紙もあり、ガラテヤ

のように激しい手紙もありました。

パウロがコリントの教会に4度も手紙を書いたのは、パウロとコリントの教会が親しく深く結ばれていた面もありますが、むしろ、コリントの教会に多くの深刻な問題があり、パウロは必要に迫られて手紙を書き送りました。コリントにあった問題の一つは分派争いです。コリント I は恒例の挨拶に続いて10節では先ず「一致の勧め」と題して教会の分裂を戒めます。

そして今日のテキストである12章の小見出しは、「**一つの体、多くの部分**」と言う勧めです。26節に、「一つの部分が苦しめば全ての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばればすべての部分が共に喜ぶのです」という言葉が出てきます。このことを頭に入れて、聖書を読み今月のテーマを考えます。

人生とは何か。私が外国でお土産に買った子犬の絵に、「私が良いことをしたときは誰も覚えてくれない。悪いことをすると誰も忘れてくれない。」と言うコメントがありました。人生の歩みでは、ややもするとこのような思いを持ち、自分ばかり損をする、人生は不条理だと考えがちです。旧約のコヘレトの言葉2章11節に、「しかし、私は顧みたら、この手の業、労苦の結果のひとつひとつを見よ、どれも空しく風を追うようなことであつた。太陽の下に、益となるものは何もない。」。人生の不条理が、運命論、宿命論を生み出し、日本人はここに逃げ込んで自分を納得させる傾向があります。私の若い頃、下村湖人の「次郎物語」が困難な時代に耐えて生きる主人公の姿に若者たちが共感をもって愛読されました。

しかし、最近の傾向として人々は悩まなくなり、簡単に諦め利他的に生きる若者が多くなりました。東大の政治学者の姜尚中（カンサンジュン）氏が書いた「悩む力」は2009年上半期のノンフィクション部門の1位でしたが、その中で「人間的な悩みを人間的に悩むことが、生きることの証なのだから、老いの最強をめざす中高年のみならず今を生きる若者たちにも何がしかの役に立つと確信している。」と書かれています。在日二世の苦悩に満ちた若き日の体験に裏打ちされた発言が人の心を打ちました。不条理だからどうにでもなれというのではなく、その中で悩みつつ真正面から取り組むことが信仰の世界に繋がります。

マルティン・ブーバーは20世紀を代表するユダヤ人哲学者ですが、82歳の時に書いた「出会い」の付録に「書物と人間」があります。その中に、「青年時代は人間と書物のどちらか選べと言われてれば、書物を取った。



時を経て喜ばしい人間とも逢ったが、それ以上に喜ばしい書物に出会った。しかしながら、人間についての多くの不愉快な経験はいかなる崇高な書物も及ばないほどにわたしの生命の根源を養ってくれたし、人間についての愉快的な経験は地上をわたしの庭園に変えてくれた。」と書いています。この言葉は私自身への問いかけであり、教会や信友会の交わりの意味はここにあると思います。和辻哲郎氏の名著「人間の学としての倫理学」では、「人間は単に“人の間”であるのみならず、自、他、世

人であるところの「人の間」なのである。かく考えるとき明らかになるのは、人が自であり他であるのは、すでに人の間の関係に基づいていることである。人は自と他の関係において人となります。良い交わりのみでなく悪しき交わりもまた人間を豊かにするので。

大震災の後、貴方は一人でない、共に生きよう、絆を固くして、といった言葉が飛びかっています。しかし共に苦しみ共に喜ぶことは、言うほどたやすくはないと思います。

本日のコリント I 12章：12～13のテキストでは、「体は一つでも、多くの部分から成り、体の全ての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である。つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシャ人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの

体となるために洗礼を受け、**皆一つの霊を飲ませてもらったのです。** これに対応する聖句がガラテヤ書3章：26～28にあります。内容はほぼ同様ですが、ガラテヤ書では、体の喩がなく、身分の表現で男と女が加わり、洗礼を受けて「キリストを着ている」という表現になっています。パウロは、教会の中にも世の中にもいろんな人がおり、異なる体を持つ人たちもいるが、ただ、キリスト・イエスにおいて一つになる。もっと言えば、イエス・キリストを信じて洗礼を受けてキリストの体である教会に結ばれて本当に一つになると言っています。



私が好んで愛誦してきた聖句は、22節の「それどころか、体の中で他よりも弱く見える部分がかえって必要なのです。」そして24節で「神は見劣りのする部分を一層引き立たせて、体を組み立てられました。」の部分です。人は弱い部分を軽んじて恥ずかしがるが、神は弱い部分を必要とされます。数多くある体の部分で不必要な部分はないと言っています。

このあとに今回のテーマである有名な**「共に苦しみ、共に喜ぶ」**が出てきます。この聖句は安易に言えるものではなく、信仰に生き、信仰に聞く具体的な勧めなのです。コリント、ガラテヤの信徒への手紙でも、「洗礼を受けて」「キリストに結ばれる」「一つになる」と語っていることに充分注意しなければなりません。水と霊のバプテスマを受けて、御霊の働きの支配の下に生きる者となった時、そこに真の一致が生まれ、人種、地位、性の違いを越えた一つの交わりができるようになり、共に苦しみ、共に喜ぶことが可能になると言うのです。

「一つの霊を飲む」は最後の晩餐をさすという説もありますが、エポティスセーメンと不定過去ですので一度限りの行為を指し、聖霊による洗礼を受けたこと、人がここで全く新しくされたと理解すべきでしょう。すなわち、イエスを主と告白し、洗礼を受け、生まれ変わった人間として一つの交わり、イエス・キリストにおいて一つになることが明確に宣言されています。ですから、コリントI 12章の26節と27節は結びつけて、「あなたがたはキリストの体であり、ひとりひとりはその部分です。だから、共に苦しみ共に喜ぶことができる」と読むべきです。

ガラテヤの**「キリストを着る」**というのも興味深い表現です。キリストをまとい、つつまれて私たちはこの世の罪と死の寒風から守られて生きることができます。キリストを着て、キリストに在って歩む時、そこにはユダヤ人もギリシャ人も、奴隷も自由人も、男も女ないと言います。これは人間社会に付きまとう民族的、宗教的、文化的な差別と対立、社会的、階級的、生物的な差別と対立、さらに生来的、身体的、能力的差別と対立の克服が宣言されています。これらは、人と人を厳しく分け、交わりを妨げていたものでした。しかしキリストに在ってそれらを越えて「一つ」になるのです。キリストに在って私たちは一人の人間、主に愛されて生きる一人になるのです。

パウロのこのような告白と勧めの背後には、パウロ自身の体験があったことは言うまでもありません。タルソの裕福な家に生まれてエルサレムに留学し、ガマリエルの門下で頭角を現した若きユダヤ教のリーダーの誇り高き男が、キリストに捕われて回心し、罪人の頭、月足らずに生まれた信仰者、と告白してキリストの使徒となりました。私のために十字架で死んで下さったキリストの愛に触れて生きる者になったパウロが、キリストに在って、共に苦しみ共に喜ぶように、勧めるのです。これは持つ者が持たない者に分け与える上から目線の発言でなく、キリストの体に結びつく自然の姿です。東日本大震災、3.11のあとを生きている私たちは、「共に苦しみ、共に喜ぶ」生を生きたいものです。

(文責：玉澤武之)



2011年度信友会修養会基調講演

未来への信頼—3・11以来の不安の中で—

大村 栄 牧師

今年度の信友会の修養会は、教会標語「どこまでも主を信頼せよ、主こそはとこしえの岩」を受けて、修養会のテーマを「とこしえの岩なる主に支えられて」として実施しています。3月11日の東日本大震災は、マグニチュード9、大津波による2万人を越える死者行方不明者を出し、加えて福島原発の事故は、多量の放射能の放出と多数の住民の避難、農水産物への風評被害等我々に計り知れないショックを与えました。今年の修養会では、どうしてもこの問題を考えざるを得ません。

基調講演は、「未来への信頼—3・11以来の不安の中で」という題で語ります。この悲惨な事態の中で、キリスト教の指導者がいろいろな場面で講演を行っていますが、私たちキリスト者は聖書のどの箇所を読み、どのように講解されるかに深い関心を持っています。今回の基調講演では聖書3箇所と3人の言葉を参照して進めて行きたいと思えます。

「はこぶね」創刊号の発行に寄せて

最初の聖書の言葉は、ホセア書6章1~3節です。特に、1節の「さあ、我々は主のもとに帰ろう。主は我々を引き裂かれたが、いやし、我々を打たれたが、傷を包んでくださる」を取り上げます。

阿佐ヶ谷教会の広報誌「はこぶね」は今年3月に300号を発行されましたが、その中では創刊号を読み直すことにしました。はこぶね創刊号は、昭和33年10月5日に発行されました。この年の9月には伊豆半島を襲った「狩野川台風」があり、死者、行方不明者1,269名を出す大災害になりました。大村勇牧師はその直前まで天城山荘で行われた教団の内外協力会に出席していました。創刊号では、このホセア書の3章1節を引用して説きあかし、「日本の教会は今日の日本の苦闘や悲しみの中で、イエス・キリストが全ての民の主であることを告白し、それによって人々に勇気と希望を与えるものにならねばならない」と言っています。大災害の混乱の中で、神の存在を疑い、不信を持つような「つまづく者」を引き戻す教会でなければならないと説いたのです。

続いて、当時の大宮溥伝道師が、フォーサイスの「祈祷のすすめ」を引用して、「本当の宗教は神学的な意味での真理を最も多く持っているのではなく、祈りによって最も力強くされた宗教である」と書いています。また証として、当時フェリス女学院の宗教主任であった川村菊枝先生が、阿佐ヶ谷教会記念祈祷会となった祈祷会について書いています。平岩愼保牧師の急逝による教会の存亡の危機の中で、途方にくれた日曜学校教師達に協力牧師夫人の松本時子姉がまず祈ろうと勧められました。松本卓夫牧師夫妻と3人の教師は、ここで祈りを通して見違えるように変えられました。「祈ったとて何になるか」と言われる人には、この時の様子を見せてあげたいと川村先生は書いています。

阿佐ヶ谷教会は、人々に勇気と希望を与える福音伝道を第1としてなすべき事となし、慰めと力を与え、御言葉と祈りによって養われてきた教会であります。

次に、イザヤ書43章の1節から5節までの聖句を取り上げます。5節は、「**恐れるな、わたしはあなたと共にいる**」(2005年度教会標語)です。43章1節は、「ヤコブよ、あなたを創造された主は イスラエルよ、あなたを造られた主は 今、こう言われる。恐れるな、私はあなたを贖う。あなたはわたしのもの。わたしはあなたの名を呼ぶ」とあります。人間は生きるより生かされている。わたしのものではなく神のものとして生きる。これがキリスト教的人生観です。ヨハネ福音書の20章11~18で行ったイースターの説教で、十字架上の死後、墓の前で一人泣いていたマリヤに、後ろから「婦人よ、なぜ泣いているのか、誰を捜しているのか」と声をかけ、園丁と間違えているマリヤに「マリヤよ」と声をかけて下さるイエスについて語りました。心細かったマリヤを「死と滅びの世界」から「生命の世界」に引き戻して下さる神を実感すべきです。

次に、**ハイデルベルグ信仰問答**の「問一」を取り上げます。



問一 生きている時も、死ぬ時も、あなたのただ一つの慰めは、何ですか。

答 私が、身も魂も、生きている時も、死ぬ時も、わたしのものではなく、わたしの真実なる救い主イエス・キリストのものであることであります。主は、その尊き御血潮をもって、わたしの一切の罪のために、完全に支払って下さり、わたしを、悪魔の全ての力から、救い出し、また今もまもって下さるので、天にいますわたしの御父のみこころによらないでは、わたしの頭からは、一本の髪の毛も落ちることはできないし、実に、すべてのことが、当然、わたしの祝福に役立つようになっていっているのであります。したがって、主は、その聖霊によってもまた、わたしに、永遠の生命を保証し、わたしが、心から喜んで、この後は、主のために生きることのできるように、してくださるのであります。

この有名な信仰問答の間一では、私たちはキリストのもので、神に生かされているという信仰こそが、キリスト者にとって生死を越えて与えられた最大の慰めであります。ここから、上述のイザヤ43章1節の「あなたはわたしのもの」と言う神の言葉に拮げることができます。自分で生きるより、神によって生かされているとの実感こそが、キリスト教的人生観の基本であります。

ディートリッヒ・ボンヘフアーの「キリスト論」から次の言葉を披露します。

「復活において我々が認識することは、神は地を放棄したのではなく、奪回したもうたのだということである。彼は地に新しい将来を与えたもうた。神が造りたもうたその同じ大地が、神の子とその十字架を支え、そしてこの大地の上に復活者が彼につく者たちのために現れた。そしてキリストの最後の日に、この大地に再び来られるであろう。キリストの復活を信仰をもって肯定する人は、もはやこの世嫌いに成ることはできない。また彼は、もはや世に溺れることもできないのである。なぜなら、彼は、古い創造の真ただ中に神の新しい創造を認識したからである。」この言葉には「世界に対する神の肯定」と題しています。信仰者は、この世に新しい創造を見出すことができます。私たちは上述のヨハネ福音書の復活の記事のように、死の闇に捕われそうになる一見甘美な東洋的無常観に陥りやすいのです。しかしこのような消極的な心に、光の方から呼び出して下さい。この世を奪回して下さる神のポジティブな姿勢の中に、私たちの信仰の立ち位置があります。

日本キリスト教団の取り組み

東日本大震災に、日本キリスト教団はいかに取り組むべきか。石橋秀雄教団総会議長は、次の聖句を掲げて、教団としての取り組みを、主題：「地域の人々の救いに仕える教会の再建を目指して」を掲げて実施すべき具体的な施策を発信しています。

聖句は、詩編124編の「都に上る歌。ダビデの詩」の8節です。全編を味わうことにします。

イスラエルよ、言え。主がわたしたちの味方でなかったなら 主がわたしたちの味方でなかったなら わたしたちに逆らう者が立ったとき そのとき、わたしたちは生きながら 敵意の炎に呑み込まれていたであろう。そのとき、大水がわたしたちを押し流し 激流がわたしたちを越えて行ったであろう。そのとき、わたしたちを越えて行ったであろう驕り高ぶる大水が。主をたたえよ。主はわたしたちを敵の餌食になさらなかった。仕掛けられた網から逃れる鳥のように わたしたちの魂は逃れ出た。網は破られ、わたしたちは逃れ出た。わたした



ちの助けは 天地を造られた主の御名にある。

この詩編の聖句は、わたし達に与えられた大災害という試練の中で、神への信頼によってのみ平安が与えられること。神の恵みが、信じる者をサタンの手から奪回してくれることを信じること、そこに慰めがあり、救いがあると言うのです。

教団は、東日本大震災救援基金として10億円を募集します。期間は、2011年から5年間です。

使途は、被災教会の再建。キリスト教主義学校及び社会福祉事業の支援。教会が行う地域への支援活動。被災地域への支援活動。被災された信徒および外国籍の方への支援に使用します。

まず、礼拝の場である教会を再建し、被災した信徒を救済して教会を支え、教会を通して被災地域に語りかけます。特に社会的弱者に目を留めて支援活動を行います。具体的には、高齢者、障害者、外国籍の方々のために支援を行うのです。

また、現在も教団や教区から被災地へボランティアを送り、泥出しなどを行っていますが、これからは現地

にサポートセンター（仙台、遠野）やステーション（石巻）を設置して救援活動を継続することにしています。

最後に「阿佐ヶ谷教会80年史」から、私の書いた序文を紹介します。

『歴史とは、単に出来事や証言を記録することではない。それらの根底を支えるものを指し示し、これらを次の世代に伝承すること。そして伝承の場となる共同体を形成していくことである。そのような意味で、これから未来にわたって、「神の歴史」を生き、伝える共同体である「教会」の形成のために、本書が生きて用いられることを願ってやまない。』

阿佐ヶ谷教会80年史は、最も大事なこととして、単に歴史の羅列ではなく、その歴史の中で支えた信仰、支え合って生きた教会の歩みを後世に伝え、分かち合っていくことでもあります。

2011年3月11日の大震災を経験した私たちは、表現できない絶望の中で、どの聖書の箇所を読むかを問われている。つまりく者を引き戻し、「あなたはわたしの者」と言ってくださり、唯一変わらない神さまへの信仰、信頼を最大のテーマとして生きて行きたいと思えます。（文責：玉澤武之）

テーマ「とこしえの岩なる主に支えられる我ら」・「3.11の大きな試練をキリスト者としてどう受けとめるか」 ——信友会員の感想・意見のアンケート回答から——



（名前はすべて A、B、C・・・としました）

A 兄：神をとことん信じ、神にお認めいただける様な信仰を持ち続けたいとの思いを強くいたしました。ハレルヤ！ **B 兄：**久しぶりの修養会に参加でき感謝です。諸先輩の方々の深い信仰に裏付けられたお話をお伺いし、久々の学びを得させていただきました。感謝します。 **C 兄：**今回のテーマは非常に重いものであった。3.11の大震災により、信仰を見つめ直した時、信仰の核心にまで討議され、本音のディスカッションが出来、よかった。これを機に更なる信仰のやしないが得られるよう祈りたい。今年の標語はふらついた信仰を立て直すことへのメッセージであると捉えられる。 **D 兄：**今年は東日本大震災という我々にとって大きな出来事に直面した。このことによって私たちの心は大きく揺れたのも事実。神にこの出来事の意味を問い続け、とこしえの岩なる主を信頼して、信仰をもつ私たちがキリスト者として生きる喜びを伝えていく事の大切さを感じる修養会になりました。共に喜び、共に悲しむものでありたい。 **E 兄：**3.11からの数日間は重苦しい、不安な日々を送った。大震災の被害と原発の危険な状況で精神が動揺し、祈ることで気を持ち直し、早く正常な日々が来ることを願っていた。教会標語にはいつも私は救われる・「主こそはとこしえの岩」のように強くあれと思う。今年の修養会は特にこの3.11を抜きには語れない重いテーマであった。人の命、これから先の社会の在り様、様々なことにどう対峙していくのか、キリストの力が必要です。 **F 兄：**時代が変わり、社会状況がどのようになっても、人間として、あるいはキリスト者として動かされない信念、価値観を持って信仰生活を送りたい。神と離れることなく、神と向かい合いただ「岩なる主に支えられている」ことを信じていければと願っている。そのために教会生活をより充実していく必要があると自分に言い聞かせている。 **G 兄：**①あまりに大きな試練に対する課題でどうしたらよいか、個人的にはわからない。信友会の申し合わせが決まったら、それに従いたい。②信頼される信友会を望む。今回の修養会に参加してみて、新規にお会いした方もあるが、一方では旧知の方の顔が見当たらなくなり、減ってきたことに不安を覚える。会友の不遇な消息ならもっと何らかの手段で知らせて貰えないか。もし病んでいるなら祈りたい。



H 兄：わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ。ヨブ記1:21 ゆるぎない信仰に立つことこそとこしえの岩であると確信しています。 **I 兄：**①3・11はとても重い課題でなかなか整理できません。修養会でも示されましたように、安易に解釈しようとせず、主の光のもとに明らかになるまで沈黙に耐えることを学びたいと思えます。②先の見えな

い不安や苦しみのただ中にいる私たちですが、「しかし勇気を出しなさい」との主のみ言葉を信じてこれからも歩いていきたいと思えます。 **J 兄**：日本人一人一人にとって、今年は大きな事件があった年。クリスチャンのみならず様々なことを考えさせる年である。この時になかったテーマだと思います。様々な思いをゆっくりとめぐらすことができ、感謝です。 **K 兄**：3.11の震災を経験しての修養会だったので、全体としてかなり重いテーマとなった。しかし久しぶりの兄弟の証しや発言を通して。「主こそはとこしえの岩」という標語が多面的に語られ、聴くことができ、参加して大変良かった。閉会礼拝も出席できず、基調講演も聴けずに1日だけの参加で残念でしたが、大変充実していて改めて「主に信頼する」という信仰を見つめなおす時となりました。 **L 兄**：入信後年月の短い者として諸先輩のお話を多く聞き、多く得るところがありました。3.11の震災について「神よ何故だ」という疑問を持たれたとの話、わたしもこれを聞き素直に安心(?)した気持ちでした。自分の心を素直に開き、そして「素朴な信仰」をもっていくことが信仰を深め、神に近づく道ではないかと思いを深くした次第です。 **M 兄**：教会標語に沿った修養会の中で、大震災のことにふれた話題が中心にならざるを得なかった。神様のこれでもかというほどの試みを私に与えられ、その重みに耐えられずにいる自分である。その中で標語にあるようにゆるぎない岩なる神に信頼し、祈り続けることであろう。福島原発の事故は想像を超えた津波のもとでおこり、未曾有の被害を与えてしまった。50年にわたって研究を続けてきた私の所属した日本原子力研究開発機構及びOB職員はこれを収束させる責任があります。福島原発の停止、汚染マップ作成や除染など周辺環境整備、住民相談窓口など多くの分野で現在までに述べ2万人の人が働いている。これらの人の支援をしていきたい。 **N 兄**：岩は動かず、頼れる逃げ所。助けが必要な時に必ず信頼できる場所。岩を見ながら安心できるゆとりを嬉しく思います。 **O 兄**：教会標語をベースに信友会の個別テーマという流れで良いと思う。初日だけの参加なので、全体の流れを体験しきれないのでコメントが不十分で申し訳ありません。 **P 兄**：3.11に問題が集約されると皆さんの受取方が強烈で個々に異なり焦点を合わせることが困難であったと思う。やむをえないことだが、また安易に一致することも恐ろしいことであろう。全員が当事者意識をいかにもつか、キリスト者として如何に対処するか、について鋭い意識を有していることに大いに触発された。 **Q 兄**：テーマ自体極めて現在の的であり、方向付けが難しい問題であるが、信友会の今後の在り方にも重要な影響であろう。役員会を中心に議論を深められ、教会の歩みを正しく積極的に進めるようご努力いただきたいと思えます。 **R 兄**：大変しんどいテーマでした。3.11と結びつけ具体的な指針を考えなければと苦労でした。 **S 兄**：3.11があまりにも身近なものであったので、結論が出るものでもないが、信仰の問題だけで解決できないだけに、より強いガイドラインの提示(牧師講演 etc.)を求めている自分にとり、大村牧師より良い導きをいただき感謝です。



T 兄：何よりもまず信友会修養会に初めて参加させていただいたことを感謝いたします。その理由は種々ございますが、いずれにせよ80歳の進行ガンの患者の新人でございます。テーマはあまりに重く、到底十分には理解できませんでしたことを実感いたします。それにもかかわらず、「主こそはわが巖」と信じ、残り少ないであろうこの世の旅路を、主に聴従しつつ十字架の主、復活の主を仰ぎつつ歩いていきたいとの思いを新たにさせていただき感謝です。 **U 兄**：東日本大震災の不安、放射能の不安、見通しの立たない不安等の中で、こんな時だからこそ

岩なる主に信頼しよう！こんな時だからこそ、勇気と希望を持って歩もう！こんな時だからこそ、他者のために奉仕しよう！ **V 兄**：東日本大震災に見舞われ私たちは何をどうすればよいか迷い、何のためか、誰のせいかとの悩みに明け暮れる生活を過ごしてきました。私のうちで長い沈黙を経て、「神が創られたものを今改めて回復し、あなたのものでされた。」との思いを少しずつ持つようになりました。御言葉で主の信頼を養うものは祈りだと教えられ、祈りを深めたい。

W 兄：無辜の人が理由もなく大量に生命を奪われた今回の出来事。私たちキリスト者にとって「これも神のわざだとしたら、なぜ、なんの目的でこのようなことをなさるのか——」という激しい問いかけをせざるを得ない。このテーマはマルコ福音書15章33節以下にあるイエスご自身が死の間際に大声で叫ばれた言葉によってその本質を問いかけているのではないか。

